
東方運命夜 the east cross fate night

黒之海鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方運命夜 the east cross fate night

【Nコード】

N1002N

【作者名】

黒之海鼠

【あらすじ】

皆が寝静まった暗い夜。そこにすむ人々の意思を置き去りにし、聖杯戦争は、その夜開幕した。

開幕

夜、暗闇の時間。今夜の月は満月、開幕の時にはふさわしい夜ではないだろうか。

「んじゃ、始めちゃってもいいわけ？」

傍らに立つ巫女が聞く。もちろんだ。そう答えると、巫女は何かをつぶやき始める。幾度となく繰り返され、幾度となく繰り返げられてきたこの戦争。今回の結果がどうであれ、自分の行うことは一つだけ、管理し、調べるだけ。

「それじゃ、やるわよ」

巫女が大地に手を触れる。その瞬間、街は戦場へと姿を変えた。

「さなえー」

部活が終わり下校しようと玄関で靴を買っていると友人のにとりに呼び止められる。

「これから皆でカラオケ行くんだけど、早苗も来る？」

「どうやら遊びに誘いに来たらしい。だが、

「ごめんなさい。今日は買い物に行かないといけないから」

両親が急逝してから七年、親戚の伝で何とか住む場所はあるし、別に食べるのに困っているわけではないのだが、住まわせてくれている親戚にいつまでも頼るわけにはいかないと思い、早苗は少しでも自分のできることは自分が引き受けようとしていた。

「そっかー」

友人は少し残念そうな顔をするが、すぐに表情をいたずらっぽい笑みに切り替える。

「じゃあ、気をつけてね。暗くなると、吸血鬼が出るみたいだから」

「吸血鬼？」

このオカルト好きの友人はすぐにこういう噂を持つてくる。

「うん、なんか最近高校生が道端で倒れてるところを発見されてる

事件があるでしょ？」

そのニュースなら早苗も知っていた。一週間ほど前から毎日一人ずつ発見されており、警察が彼らに話を聞くと「子供に襲われた」という答えが返ってきたらしい。だが、なぜ吸血鬼が出てくるのだろうか。

「いや、これはその倒れてた子の友達つてやつから聞いた話なんだけど。何でも、首筋に何かに噛まれたようなあとが残ってたんだって」

「それで吸血鬼ですか」

確かに、それなら吸血鬼の仕業とも取れるかもしれない、まあ、吸血鬼が本当にいればの話だが。

「本当に吸血鬼の仕業かはわかりませんが、できるだけ注意しますね」

季節は冬、できるだけ早く切り上げたのだが外は六時の時点ですでに暗くなっていた。本当に吸血鬼の仕業とは思わないが、注意するに越したことは無いだろう。

「ただでさえ夜道を一人歩きなんだからできるだけ気をつけてね。」

じゃ、また明日」

そういうと、にとりは近くで待っていたほかの友人たちのところへかけていった。

「さて、早めにお買い物して帰らないと」

早苗は誰に言うとも知れずそう言つと、一人夜の闇に歩き出した。

「あの特売の品はほしかったな」

スーパーからの帰り道、買い物袋を手に持ちながら早苗は今日の反省をしていた。

「お豆腐より先に買いに行つてればもしかしたらあったのかもしれないのに」

少し、俯いていた顔をあげ、なんとなく周りを見える。明かりは街灯がそこらじゅうに立っており、割と遠くまで見えるようになった。

ていた。前を見ると、早苗は自分の少し前に少女が立っていることに気づいた。

「やれやれ、ようやく今日の獲物にであえたわね」

そういいながら、こちらに近づいてくる。ピンク色の洋服に身を包んだ彼女は獲物を見つめる肉食獣のようにこちらを目でその場に縫い付ける。

「あら？」

もう少しで目の前に来る、というところで彼女は怪訝そうな顔をし、動きを止めた。

「私の魔眼が聞かない。なるほど、あなたも、魔術師ということね」
彼女は何かをつぶやいた後、笑みを漏らす。そのせいで早苗は気づいた、気づいてしまった。その少女の犬歯が以上に長く成長していることに。

「それなら、お預けをされることもなさそうね。久々に全部の血が吸えそうだわ」

早苗はこの少女がにとりの言っていた吸血鬼だ理解した。体が本能的な恐怖に包まれる。逃げようとするも体が萎縮してしまい、動けそうに無い。

「さて、じゃあゆつくりと楽しみましょうか」

少女はゆつくりとこちらに近づいてくる。その顔は、自らの娯楽を楽しんでいるときのような笑顔に包まれていた。

一歩、一歩。少女と自分の距離が近づいていることに早苗はあせりを見せる。そしてついに、少女は早苗の目の前にきた。

「安心しなさい、痛みは無いわ」

少女が早苗の首に歯を突きたてようとしたときだった。

（トスツ）

小気味いい音ともに、少女の背中に何かが突き刺さる。少女の胸を貫いたそれは金色に輝く矢だった。そして、早苗も正気に戻る。

「逃げ・・・なきゃ」

それだけつぶやくと早苗は全速力で駆け出した。少女がもう一度自

分に襲い掛かってくると思ったのか、矢が自分も狙ってくると思ったのか、わからないが、早苗はあの場所から逃げ出すために全力で逃げ出していた。

「はあ、はあ」

息が続かず。空き地の前で立ち止まる。息を整え、もう一度、走り出そうとし時だった。

「だめじゃない、逃げ出しちゃ」

「え？」

声が聞こえたと思った瞬間ものすごい力に吹き飛ばされ、空き地に寝そべるような形になる。

「さて、さすがにこれで動けないでしょう」

顔をあげると、そこには先ほど胸を貫かれて絶命したはずの少女が立っていた。

「吸血鬼にあんな攻撃効くわけがないじゃない。あの攻撃を命令したのは相当の間抜けね、あなたもそう思うでしょ？」

再び現れた恐怖の感情に口が利けなくなる。

「鬼ごっこって気分でもないし、手早く済ますべきね」

吸血鬼の声を聞きながら早苗は胸から下げていたお守りを握り締めていた。

「あら、お祈りでもしてるのかしら？」

吸血鬼がサディスティックな笑い声を上げる。吸血鬼の言うとおりだった。非力な早苗には助けが来ることを祈るしかない。

「残念だけど、私はそれを待っているほどお人よしじゃないの。だから、死になさい」

吸血鬼がこちらに飛び掛ってくる。早苗にはそれがとてもスローモーションに見えた。

だが、早苗にできることは一つだけ、ただ祈るだけだ。

（お願い、誰か助けて！）

祈りは、通じた。

「風祝の巫女よ。その願いをかなえよう」

頭の中に声が聞こえたと思うと。目の前で、光が炸裂する。吸血鬼はそれに気づいたのか、体を無理やり後ろに戻した。

「くっ、まさかこのタイミングで！」

吸血鬼の少女が何かを叫ぶ。光が消え果ると、そこには白髪の少女が立っていた。外見はほぼ人間と変わらないが、頭に生えた獣の耳腰に挿している剣。そして、彼女の奥底からほとばしっているような力を感じ判断するこの少女は人間ではない。しかし、先ほどまで自分襲おうとしていた吸血鬼とは違い、敵愾心は感じられなかった。現れた少女は早苗のほうを向きこつ言った。

「問おう、あなたが私のマスターか？」

開幕（後書き）

初投稿です。ぬるぬると更新していきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1002n/>

東方運命夜 the east cross fate night

2010年10月10日16時17分発行